

# 非営利協同・市民事業が 連帯してのまちづくり

2022/5/23 波止場会館

◎特定非営利活動法人 ワークス・コレクティブ  
協会 18年の振り返りと今後の展望

理事長 上田祐子

◎「これからのワークス・コレクティブ運動」  
社会的連帯経済とコミュニティ・オーガナイズing

藤井敦史氏

(立教大学コミュニティ福祉学部教授)



## 記念フォーラム参加報告 理事 岡 真帆

総会を彩ってくれた波止場会館の窓からの素晴らしい眺望に別れを告げて暗幕をひくのはやや残念ながら、お話に集中するにはちょうど良いと気持ちを切り替えて参加致しました。これまでも藤井先生のお話をうかがう機会には恵まれていましたが、あまり頭を使わずに日々を送っている私は、「社会的連帯経済」といった用語を聞くだけで難解な理論かと臆する気持ちに捉われへっぴり腰でおりました。誠に申し訳ございませんでした。今回はしっかりついて行きました！

2020年12月の労働者協同組合法の成立を受けて、私たちワーコレも労働者協同組合法の適用を受けるワーコレと、その枠にはまらずにコミュニティワーク的な活動を続けるワーコレとに分化していくであろう状況に、ワーコレ協会としてどのように対応していくのかは今年度の大きな挑戦になっていくでしょう。

こういった状況の変化の中であって、「ワークス・コレクティブは既に社会的連帯経済を創り出している」という藤井先生の心強いお言葉をいただき、これまでの諸先輩方の苦勞はすでに報われている、種は蒔かれて育ちつつあるのだとの思いを強くしました。グローバルな大企業でバリバリ働く人たちが効率を重視し大きな利益を上げるその流ればかりが評価される世の中には、困難を抱える人々や違う価値観を持つ人々の生きる場所がありません。困難を抱える人々とともに働く社会の実現のために就労支援を行うと一口に言っても、中にはいくつかもの、また多様な課題がある事も協会は活動していく中で学んできました。就労に至る前段階での支援、学習面・生活面・精神面

での支え。実習先を見出す事、協力企業を見出す事、実習中の伴走、実習後の相談、受け入れ側への講座開催、本人の希望とのすり合わせ、地方自治体との協力等々、大きな問題を声高に叫ぶのではなく、小さな課題をひとつずつ乗り越えてきた先にもこそ、社会的連帯経済が見えてくるという事を、今回のフォーラムで確信することができたように思います。

From the world as it is to the world as it should be…いい言葉ですね。「社会を変えたいならば、その社会に内在し、正義を振りかざすのではなく、そこに生きる人々にしっかりと向き合うこと」まるで私たちのためにあるような言葉です。地域に根差すわたしたちワーコレが、互いへの共感と責任、それぞれの自己利益(セルフ・インタレスト)を尊重し紡ぎあうことで、連帯を生む、それが power となり、漸進的な社会改革へと繋がるという事。今までも私たちは感覚的にそのことを知ってはいました。ですが、こうして言葉にして語っていただくことでしっかりと胸に落ちて来てくれました。

今回のフォーラムに参加して、個人的にはやはり勉強会や講演会を敬遠してばかりではいけないという反省も生まれましたが、何よりこれからの活動に誇りをもって、愛ある power を共に求めていくのだと感じることができました。ありがとうございました。

資料中に載せてくださったマーティン・ルーサー・キング jr.の言葉をご紹介します。

『愛のないパワーは無責任で悪用されるものだが、パワーのない愛はセンチメンタルで弱々しい。最高のパワーは、正義の要求を実行する愛であり、最高の正義は、愛に背く全てのことを正すパワーである。』



## 18 回総会記念フォーラムに参加して

理事 荻原 妙子

最初に私は生活クラブで活動し「ワーカーズ・コレクティブ」ではないまま協会の理事をさせて頂いており、その視点でのフォーラム報告となることをおことわりいたします。

2022 年 10 月の協同労働法施行を目前にワーカーズ運動に新たな動きが出ている。1982 年、働くことの復興を掲げ、生活クラブが初めてワーカーズを組織化し 40 年。ワーカーズは生活や地域に必要な有償労働とコミュニティワークで市民社会を強くしてきた。行き過ぎた新自由主義経済へのオルタナティブとして、生活クラブ運動グループが目指す社会的連帯経済を実現する社会づくりだ。今、担い手の高齢化や社会情勢変化で、ワーカーズ・コレクティブ運動は改革と転換が求められる時期を迎えているといわれる。

上田理事長は、ワーカーズ・コレクティブ・生活クラブ生協組合員・地域の多様な主体を巻き込んで、協会が展開する生きにくさを感じる人々への支援の拡がりを報告された。コロナで生きづらさをかかえる人々がさらに顕在化し増えており、地域にねざす活動は、就労・居場所・地域とのつながりの拠点として今後ますます重要な存在で、魅力的だ。上田理事長の報告は次のメッセージで結ばれた。「ワーカーズ・コレクティブをもっとおもしろがろう」。

次に藤井敦史立教大学教授の講演。

新自由主義経済で疲弊した世界の新たな潮流として、イギリス・フランス・スペイン・韓国など多くの国で立ち起きている社会的連帯経済を研究する藤井先生は、日本での社会的連帯経済の担い手をワーコレの実践にとらえ、協会や岡田百合子副理事長へヒアリングを重ねてきた。ワーコレ運動の新たな潮流や中間支援機能について「すでに実践の中に答えはある」という。地域で社会的連帯経済・コミュニティ形成を担う人材育成

には、就労支援「はたらつく・ざま」・ひきこもりサポート「みんなの居場所 ここから」など協会の実践の言語化こそがオルタナティブになる、ということだ。そのうえで、さらに話題のコミュニティ・オーガナイズングについて、生活クラブの「『おおぜいのわたし』たち」に例えて紹介された。詳細を知りたい方は、当日資料を協会に請求されたい。

私(わたし)的には、これって、生活クラブ運動の拡大活動(共同購入に参加する人を増やし、商品ではなく消費材を基盤とする生活、参加型の責任も果たす福祉、再生可能エネルギーなどにつなぎ、社会を変える運動に参加する人を増やす)と同じじゃないか！と叫びたかったとお伝えしたい。異なる考えを持つ人に、話しかけ、感情を引き出し、自分や他者の自己利益を浮き彫りにしつつ、組織(班・commons・デポ・ワーカーズ・コレクティブ)を作ってきた。ワーカーズ・コレクティブもそうやって拡大されてこられたはず。もやもやから晴れ間が見える講演だった。

(参考:コミュニティ・オーガナイズングは「仲間を集め、その輪を広げ、多くの人々が共に行動することで社会変化を起こすこと」。鎌田華乃子「コミュニティオーガナイズング〜ほしい未来をみんなで創る 5 つのステップ」)。

## アンケートから☆☆☆☆

■色々な弱みをもった人が生きていける社会になるかなめは、やっぱり人と人を結びつけることのできる個人なんだなと思いました。また、社会を変えるところみを本にした「HOW TO RESIST」に書いてある『民衆の「力」の弱さ』の話が納得できました。政治につながる事が大事です。

■協会の 15 周年以降の 3 年間は、「はたらつく」の展開も大きく進み就労支援を通して社会的連帯経済の広がりを目に見えるものとした。このような状況の中で、コミュニティ・オーガナイズングを新たなツールとして活用し、ワーカーズ・コレクティブ運動の展望、中間支援組織の姿をイメージするきっかけとできるのではないかと。

■問題は会議につながり、課題はアクションにつながるという言葉は使えそうと思いました。

■具体的な課題を拾い出し、一つずつみあげていく事が大切だと思う。他者との連携を強めていきたい。

